22. 月経随伴症状に対する女性心身医学的管理について

獨協医科大学産科婦人科学
添田わかな，望月善子，茂木絵美，根岸正美，大藏健義，深澤一雄

月経随伴症状とは，月経開始の 3 ～ 10 日位前から始まる精神的，身体的症状で月経開始とともに減退ないし消失する月経前症候群（premenstrual syndrome：PMS）と月経期間中に月経に随伴して起こる病的症状である月経困難症の二つを言う．これらの病態はいまだ明らかでなく，治療に苦慮することは少なくない．今回，精神科にて既に加療を行っており，月経随伴症状を呈したため当科に紹介になった 4 症例を提示し，女性心身医学的管理の意義について検討する．

【症例】① 26 歳．X 年より不安障害の診断にて SSRI，抗不安薬で加療中であった．X＋2 年，月経の 1 週間前から頭痛，倦怠感，発熱，イライラ，発汗あり当科紹介．症状日誌を確認し，PMS 疑いと診断．加味逍遥散開始したところ症状改善し加療継続中である．② 36 歳．Y 年よりパニック障害の診断で SSRI，抗不安薬を内服加療中であった．Y＋4 年，第二子出産後，月経数日前の嘔気，頭痛と排卵前後の下腹痛があるため当科紹介．症状日誌を確認後 PMS を疑い加味逍遥散，芍薬甘草湯を開始した．現在は症状改善し経過中．③ 22 歳．15 歳時より数回の薬物大量内服による入院歴あり．現在，パーソナリティー障害の診断にて精神科通院中であったが，向精神病薬の投薬はなし．月経開始前のイライラ感と月経中の大腿から腓腹部の痛みあるため当科紹介となった．症状日誌確認後，PMS の診断にて黄体期のみ SSRI の服用を開始した．内服開始から速やかに気分と痛みが改善し現在も同処方にて継続加療中．④ 37 歳，W 年よりパニック障害の診断で SSRI，抗不安薬を内服加療中．W＋1 年，月経前のイライラ感，頭痛にて当科紹介．症状日誌を確認後，OC（低用量ピル）を開始した．症状改善し，現在も継続加療中である．

【考察】精神疾患合併の月経随伴症状に対しても，症状日誌が診断に有効であった．月経随伴症状を認めた場合，精神科受診中であっても，女性心身医学的アプローチが有効であることを示した．各症例において精神科と婦人科との密な連携をとることにより，個々の症例にあわせて最適な治療を選択しうることができると考える．

23. 各科診療連携を目指した遺伝外来の運営

獨協医科大学越谷病院小児科
坂爪　悟，城戸康宏，永井敏郎

1. はじめに

小児科遺伝外来の役割は従来，小児の先天奇形症候群の診断が主であった．近年，合併症早期発見および治療介入による余命の確保が可能となった．また生殖適応もこうじょうしている．遺伝外来は成人後や次世代を見据えた医療である．

2. 成人遺伝病の告知や罹患可能性がある成人遺伝病の確定診断に携わる臨床遺伝部門の役割として，既存の診療科を超えたシステム作りが全国的に整えられつつある．

3. マルファン症候群を提示し，多科での診療のフローを考察し今後の診療体制をシミュレートしてみる．

マルファン症候群の自然歴・病歴【図 1】

年齢ごとさまざまな対応が必要で，診療主科を持つことが難しい．多臓器，複数の世代の患者サポートのために，臨床遺伝診療部門が有用である．【図 2】

4. 年間症例

小児遺伝外来としては，臨床遺伝専門医（生殖に関する遺伝カウンセリングが可能）2 名で対応し約 40 例の新規患者を診療している．【表 1】

5. 患者家族への貢献

臨床遺伝診療部門の確立は，早期の診断，合併症予防により社会生活を担保する．

家系内罹患者を適切に早期に医療に取り込み，次世代を見据えた医療に欠かせない診療部門である．

6. 今後の展開

成人領域への対応を見据えた臨床遺伝診療部門は生涯にわたる治療可能な遺伝病の対応を容易にする．また家系検索により診断に至らない罹患者の診療を促すことが可能である．

7. 周産期医療，生殖補助医療への対応

患者の妊孕性に応じて周産期センターや生殖補助医療の専門家と安全性の高い高度な医療を実現できる．

まとめ

以上より総合遺伝外来の開設が急務である．

図 1

表 1

	2009-2011	2011-2012
生殖医療・胎児診断	33	16
マルファン症候群		6
血友病 A		3
フォンヒッペルリンドウ病		1
筋緊張性ジストロフィー		1
シャルコマリートース一病		1
アンドロゲン不応症	1	
若年型糖尿病 MODY		1
ターナー女性	1	
多因子疾患	1	3
計	36	32

図 2